



受傷痕

出土した人骨約5,300点は、中心域東側を区画する溝の中から散乱状態で出土しました。

弥生時代後期（2世紀）の人骨が、墓に埋葬されていない状況で多数発見され、しかもそのうちには鋭利な武器によって傷つけられた骨が110点（人数にして10体分）含まれていました。（うち3点の寛骨（骨盤）には、銅鏃が刺さっていました。）10歳代から30歳代までの男女が受傷しており、その部位は主に胸と手足で、背部からの傷が多くみられます。治癒傾向は認められず、ほぼ即死と考えられます。

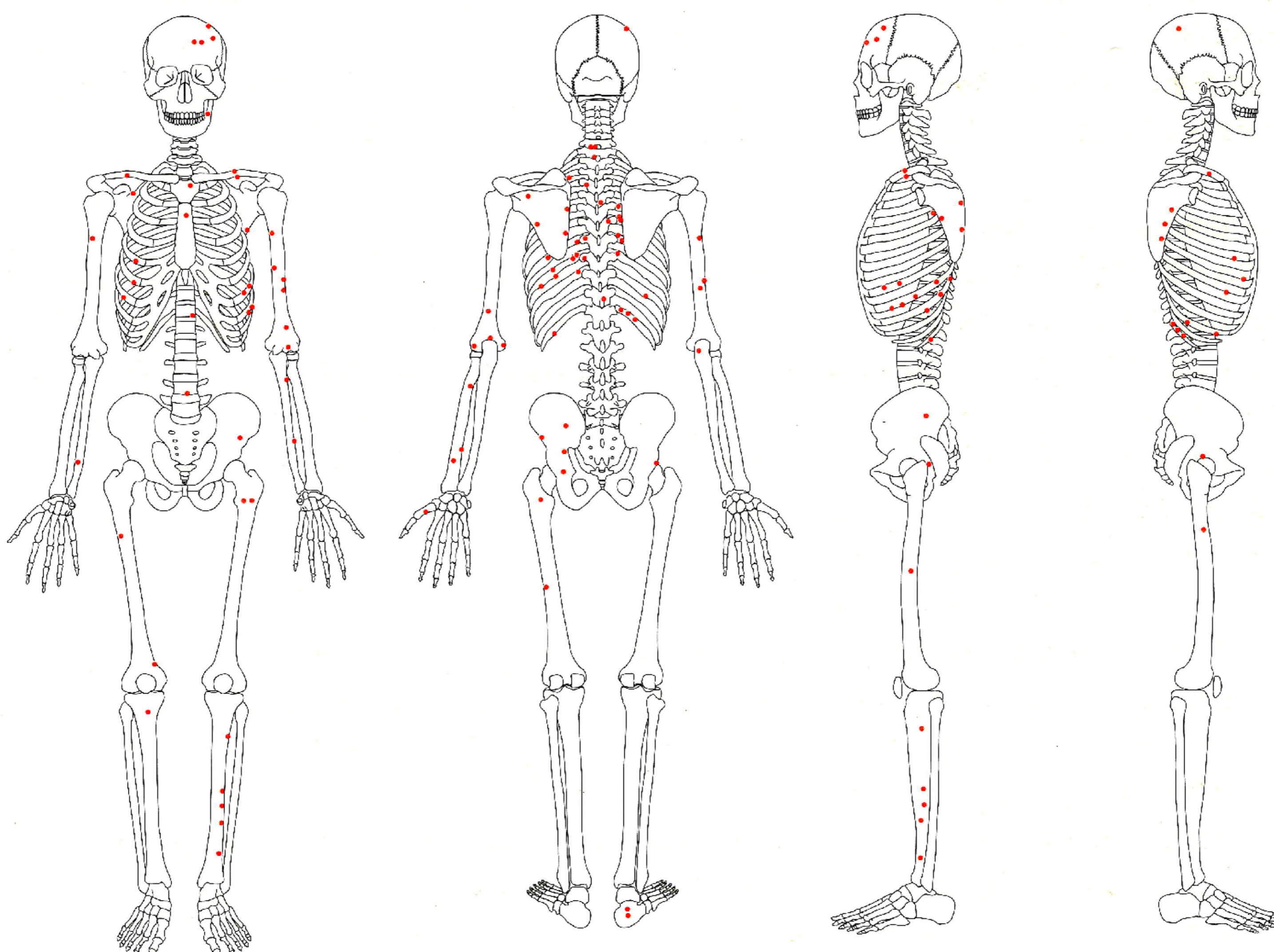


銅鏃が刺さった寛骨（骨盤）

こうした状況が、魏志倭人伝に記載のある「倭国乱」（「倭の国々で戦乱がおこり、長年にわたり互いに争いあった。

…倭国乱、相攻伐歴年」）を示す惨状なのかどうかは、まだ明確な答えは見つかっていませんが、当時、何らかの争いごとがあったことは間違いありません。弥生時代後期の青谷上寺地遺跡が必ずしも平穏な社会ではなかったことを物語るものといえるでしょう。

なお、人骨が埋まった後、この溝は杭を打ち直すなどの改修がおこなわれており、この事件によって青谷上寺地遺跡の集落が廃絶してしまっただけではありません。集落はその後3世紀後半まで存続します。



受創痕の位置（成人）

図出典：井上貴央、松本充香 2002 「第1節青谷上寺地遺跡から検出された人骨」 第411 図

「第4章 関連諸分野の成果」『青谷上寺地遺跡4（本文編2）』、鳥取県教育文化財団調査報告書 74